

●本文使用書体／游明朝体 02 OTF R

満を持して“攻め”に転じた

供儀くぎぎよ創貴すゐの次なる一手は——？

創貴、りすか、ツナギの最強パーティーの

行く手に新たな決戦が待ち受ける！

——魔法は、もうはじまっている！

鍵

となる

存在!!

新本格魔法少女りすか

西尾
維新

NISIOIIN

Illustration / 西村キヌ
(CAPCOM)



たまには趣向を変えて、こんな話をしてみよう。アメリカ合衆国アリゾナ州に、一人の男が住んでいた。男は善良で誰からも好かれる若者だった。あるいはほとんどまないろくでなしで皆から一様に嫌われていた老人だった。それともあるいは先月引越してきたばかりの風来坊で、いつどこへ消えてしまっても一人も気付かないような根無し草だったかもしれない。その辺りのディテールは別にどうでもいい。どうだったところで、この話には微々たる影響すらも及ぼすことはない。とにかく、この男——仮にジェイソンとでもしておこう、ジェイソンは、ある日、自宅のリビングで、変わり果てた、無残な死体として発見されることになる。発見者？ それもまたどうでもいい。家族だったかもしれないし友達だったかもしれないし、セールスマンだったかもしれない。すぐに警察がやってきて、捜査が開始された。背中からナ

問題編——勿論この話、ジェイソンを殺した犯人はフレディであって、彼のアライは、ただの偽り、フェイク以外の何物でもない。一見不可能、一見不可解に思えるこの事象を解決する鍵は——決して、魔法ではない。ジェイソンもフレディも、この場合は、ただの人間ではない。魔法なんて使えない。だから、魔法ではない。いや、そうはいつても、やはり魔法ではあるのかもしれない。一種の魔法ではあるのだろうか——しかし、それは、それだけではなく——

★ ★

夏休みが始まって一週間が経過したその日、このほく、供養創貴は、自分の住処である佐賀県河野市を離れ、福岡県博多市の中枢部に近い位置の、とある港公園のベンチに、座っていた。福岡に来たのは昨日今日の話ではない——夏休みが始まってすぐだ。一人で来たのではなく、『赤き時の魔女』、水倉りすかと、城門管理委員

イフが刺さっていた。あるいは銃殺だったかもしれない。とにかく、他殺なことだけは確かだった。そして、容疑者はあつという間に特定された。ジェイソンを殺すとしたらその人物しかいないと言っているほどに、その容疑の度合い色合いは濃かった。法治国家でなければ即座に身柄が拘束されただろうというくらい。しかし——容疑者の名前を、仮にフレディとすると、フレディには、確固たるアライバイがあった。ジェイソンの死亡時刻は、発見が早かったこともあり——いや遅かったのかもしれないが、とにかく、二〇〇二年の二月二日の午前二時であることがほぼ確実だったのだが、その時間、フレディは、自宅で友人と呑んでいた。恋人といちゃついていたのかもしれないが、とにかく、自宅にいた。フレディの家はジェイソンの家のすぐ近くではあるのだが、その日の午前二時、彼はジェイソンの家に、近寄ることすら、していなかったのだ。証言者が偽証している可能性は、ゼロだった。たとえ友人や恋人であろうとも、フレディをかばう理由などないからだ。さて、ここまでが

会特選部隊隊長、撃場つちまばいたちと、三人で連れ立って、来た。先日、神にして悪魔、全にして一、『ニャララトップ』、水倉神橋が、己の目的のために、『魔法の王国』長崎県から、『城門』を通じてこちら側に呼び出した『六人の魔法使い』、その最初の一人である人飼無縁——『眼球倶楽部』の人飼無縁を、共同作業共同戦線によつて突破したことにより、とりあえずほくは、城門管理委員会——つまるところ、撃場いたち——ツナギと、同盟を結ぶことに成功した。言うまでもなくツナギの魔法はりすかにとって天敵的なそれなので、りすかを説得するのにはそれなりの労力を要したが、それでようやく、こちら側として、ついに戦力が整った——という感じだった。いや、整ってなかったところで、既に一人目——人飼無縁がほく達の前に姿を現している以上、ほく達——ツナギまで含めて考えて、ほく達に、時間的な余裕というものは、全くなかった。そもそもほく達には、水倉神橋、そして『六人の魔法使い』が、一体何を目的として『城門』を越えてきたのか、全く分かっていない

し、唯一キーワードとして知っている『方舟計画』というのが何なのかさえ、知らないのである。対応するにもしようがないというのが現状だったが——しかし、城門管理委員会は、さすがというべきなのかどう表現するべきなのか、やはり当然というべきなのか——『六人の魔法使い』の動向を、ある程度まで、把握していたのだった。人飼無縁の場合は遅きに失したという感じだったが、残りの五人も——全員とは言わないが、ある程度までは、わからなくもない——とか。ちょうど学校が夏休みに入ったこともあり、だからぼく達は——本格的に動くことにしたのだった。九州中に散っているらしい『六人の魔法使い』のそれぞれを、それぞれに対応するために——城門管理委員会の『遊撃部隊』として、佐賀県を出立したのだった。そして、とりあえずは——ここ、福岡県、博多市だった。ついこの前、地下鉄の事件で訪れたばかりの土地だ——それでなくとも、佐賀住まいのぼくにしてみれば、博多なんてのは気が向いたら遊びに来るような身近な場所だが、その身近な場所に、『六人

に、そう言った。
「ん……そうだね」
りすかも頷く。眼前で繰り広げられている、壮絶なバトル——それは、数日にわたる張り込みの結果、とうとう発見した魔法使い、『回転木馬』の地球木霊と、城門管理委員会設立者である撃場たちの地球木霊と、城門現でできないような、取っ組み合いだった。事前情報では、地球木霊は単に、直接攻撃型の魔法使いであるとかわかっていなかったのだが、今となっては彼の使う魔法ははっきりしていた——属性は『肉』、種類は『増殖』——己の肉体を戦いやすいように改造してしまふ、というのが、彼、地球木霊の、魔法だった。たとえば——というよりはたとえるまでもなく、彼の今の姿は、既にぼく達が最初に見たときの、彼ではない——背中と胸から腕が二本ずつ生えて、脚も二脚から四脚へと増えている。頬に眼球が三つ。細かいことを言えば、両手足の爪が刃物のように、鋭く尖っている。ありがちなたとえだけれど、御伽噺に登場するような悪魔を、そのまま

の魔法使い』の二人目が、どうやらいるらしい——というのだった。細かい場所は、九州最大のショッピングモール、キャンドルシティ博多。天神と並んで、観光名所としても名の通った、映画館から飲食店までおよそ娯楽と言えるものが全て揃った、東京ドームと比べたくなるような巨大施設。そのキャンドルシティ博多で、『六人の魔法使い』の二人目——『回転木馬』、地球木霊が、何度か目撃されている——それが、城門管理委員会諜報部がキャッチした情報だった。で——

「なあ——りすか」
「ん？ なに？ キズタカ」
「まあ、薄々分かってたことだったけどさ——」
「うん？ 分かってたことって？」
「ツナギって……洒落にならないくらい強いな」
キャンドルシティ博多のすぐそばの、港公園——ベンチで並んで座っている、ぼく、供儀創貴と、りすか、水倉りすかの、眼前で繰り広げられている、壮絶なバトルを眺めながら——ぼくは、感嘆の念を隠そうともせず

具現化したような姿だった。戦いやすい姿——好きなような形に変形、否、変態することができるといのが、彼、『回転木馬』、地球木霊の魔法——しかし。

「しかし……魔法使っているか、二人とも、化物とか、妖怪とかにしか見えないうか、……」
「人払いの結果を張ったとは言っても、もしも一般人に見られたらと思うと、はらはらするの」
「普段他人の目なんてまるで気にする様子もないりすかがそう言うんだから、よっぽどだよね……」

対するツナギの魔法も、同じく肉体の変態——しかしこちらは、その変態能力は、『口』に特化している。全身に五百十二、それぞれが牙の鋭い獣の口を作り出すというのが、ツナギの魔法——しかし、地球木霊とは、その意味合いが全く違う。ツナギは『戦う』ために肉体を改造するのではなく、ただただ『食べる』ために、その肉体を、数多の口へと変態させるのだ——属性は『肉』、種類は『分解』、ありとあらゆるものを、分解し吸収し自分のものへと変換してしまふ、究極にして絶対にして

無限の魔法——地球木霊と繋場いたち。二人のバトルは、まさに壮絶としかいようのない有様で、今のところ、全く拮抗している、どちらに転んでもおかしくないような、状況だった。

「……………」

いや、正直に言えば、魔法使いでもなんでもない、ただの小学五年生であるこのほくには、このバトル、既に視認することができていない。残像とか、砂煙とか、その辺から判断して、適当にものを言っているだけだ。ツバメが餌を取り合っているのを、観察している気分だった——勿論、そんな生易しいものでも、風流なものでもないけれど。

「りすか——りすかはどう見る？ この勝負」

「ん……」

ちなみに、この勝負——最初はりすかも参加していたのだが、すぐについていけなくなつて、ぼくが座っていたベンチの横へと、りすかは腰を降ろしたのだった。血液の中を流れる魔法式によって構成された魔法陣を発動

れ』た部位を、次々に再生可能——けど、キズタカ、こんな、綱引きとは、言えないの」

りすかは言う。

「ただ単純に、一方的に、地球木霊がツナギさんに、搾取されているだけ——喰らわれる瞬間に多少のダメージを与えられなくても、そんなの、食べた分だけ回復しちゃうツナギさんの前じゃ、問題にならないし——『増殖』は、再生能力としては悪くはないけれど、しかし限度限界がないわけじゃないの。不死でもなければ不滅でもない。魔力が尽きたらそれまでなの」

「魔力ね。じゃあ、地球木霊の勝機を読むなら、彼の魔力が、ツナギの許容量を超えることか」

「……できると思うの？」

「まさか」

りすかの、魔法式及びそれによって構成される魔法陣まで含めた全魔力、足すことの、その莫大な魔力量だけで五つの称号まで与えられた影谷蛇之の『矢』、十二本——それでもパンクしない、ツナギの恐るべき『食欲』

させて、二十七歳までの『時間』を『省略』し、二十七歳の姿にまで『成長』したりすかならばともかく、十歳現在のりすかでは、単純なパラメータの問題で、あの二人には遠く及ばないようだった。

「……考えるまでもないの。ツナギさんの勝ちなの」

「ふむ」

「勝負にすらなつてないの。ツナギさんの独壇場つて感じなの」

断言とは意外だった——というか、りすか、ツナギのこと、さん付けなんだ……。天敵のはずなのに……。いや、天敵だけに、か……。

「しかし——見たところ、つていうか見えないけど、どっこいどっこいの綱引き具合のように、うかがえるけど？ 均衡状態つていうかさ」

「まあ、確かに、そうなの。ツナギさんは、全身を『口』に変態してるから、地球木霊から攻撃を受けた瞬間、その部位を、拳だろがなんだろうが、『喰らう』——しかし地球木霊は、その『増殖』の魔法で、『喰ら

を、仮に超える魔力を地球木霊が保持していたとするなら、そもそもこんな、不毛なバトルは、成立していないだろう。ぼくらも、こんな暢気に、ベンチで観戦なんてしてられない。

「……つかさ。ツナギの魔法つて、りすかにとつて天敵であるとか言うより、どんな存在でも例外なくあまざず食らっちゃうつていうんだから、ほとんどの魔法使いにとつて、天敵じゃないのか？」

「ていうか、無敵なの……」りすかはぼやくように言った。「それこそ、『魔眼』くらいだったと思うの。ツナギさんに対抗しうる魔法というのは」

「うーん……遠距離の直接攻撃、しかもタイムラグなしつて条件か……」

人餌無縁を打破してしまった今、そんな魔法使いが、そうそういるとも思えないし……。それでは本当に本当の無敵じゃないか。伊達に二千年生きてるわけではないということか。

「ん………決着がつきそうなの」